

清韓露渡航案内

線路は第一浦蘆斯德よりイルクーツクを経てチエウメンに至る官道にして長さ凡そ二千里に達す(浦蘆斯德よりイルクーツクまで一千一百餘里)第二は沿海州のハバロフカ府よりヤクーツク府に至る凡そ七百里第四イルクーツクの東なる上ウヂンスク府より哈克圖に至る凡そ四十里是れなり

又浦蘆斯德より清國琿春に至るは凡そ七十五里なり而して哈克圖より北京に至る郵便線路は凡そ四百里あり

内地航路はオビ、エニセイ、レナ黒龍江の四大河及びバイカル湖ありて皆瀛船を通ず而してオビ河最も水運の便ありてチエウメン、トムスク兩府間は九日間に達すべし其他黒龍江瀛船會社ありて黒龍江口よりストレチエンスク府間

清韓露渡航案内

を往來す

有名なる西比利亞鐵道は西はミヤスク府に起りオムスク府を経てオビ河を超へトムスク府に至り之れよりイルクーツク府を経バイカル湖の南岸に沿ひ黒龍江の起点なるストレチエンスク府を経ハバロフカ府に至り之れより烏蘇里江の右岸に沿ひグラフスカヤ府を経て浦蘆斯德に至る

又西比利亞鐵道中滿州の齊齊哈爾を経寧古塔を過ぎて浦蘆斯德に達する線路を有名なる露清鐵道或は東清鐵道と稱し其全長一千二百七十三哩の中九百四十五哩は支那の境域に屬す

郵便は前に述べたる路線により主要なる都府を連結し電

線も亦一般に延長し樺太嶋及び本邦長崎へは海底電線によりて連接せり

清韓露渡航案内

浦港より函館に至る	四百四十五哩
小樽	四百五十七哩
長崎	六百八十四哩
横濱	千四百三十哩
釜山	五百十哩
元山津	三百四十哩
上海	千八十七哩

貿易

西伯利の貿易は未だ盛ならず而して其海よりするものは

清韓露渡航案内

ニコライスク及び浦蓋斯徳の二港に於てし其の陸上よりするものは朝鮮との境上(朝鮮慶興)及び支那の境上なる哈克圖とす支那への輸出品の主なるものは毛皮にして輸入品の主たるものは茶なり即ち支那の茶主として磚茶は漢口より直ちに哈克圖に送り又は漢口より先づ天津に致し之れより張家口を経て哈克圖に輸送す然れども海運の便開けてより以來哈克圖の貿易漸く衰へ税關もイルクーツク府に移りイルクーツク府は又西比利亞内地貿易の中心となれり

西比利亞の内地貿易は専ら年市による年市とは時季及び場所を一定して商人相會し互市するを云ふ是れ西比利亞は土地廣大なるに比して都會の數少く地方の住民は遠く

都會に出でて其需要品を求むる能はる又各村固より商店を
設置する能はざるに因り是を以て各省州皆年市を設
置して歐羅巴露西亞の精製品と地方の産物とを交換す

清韓露渡航案內終

明治三十七年四月二十日印刷

明治三十七年五月十四日發行

著者 桑村常之丞

發行者 小川寅松
東京市京橋區南紺屋町十八番地

印刷者 龍雲堂大場沃美
東京市神田區南乘物町十五番地

不許複製

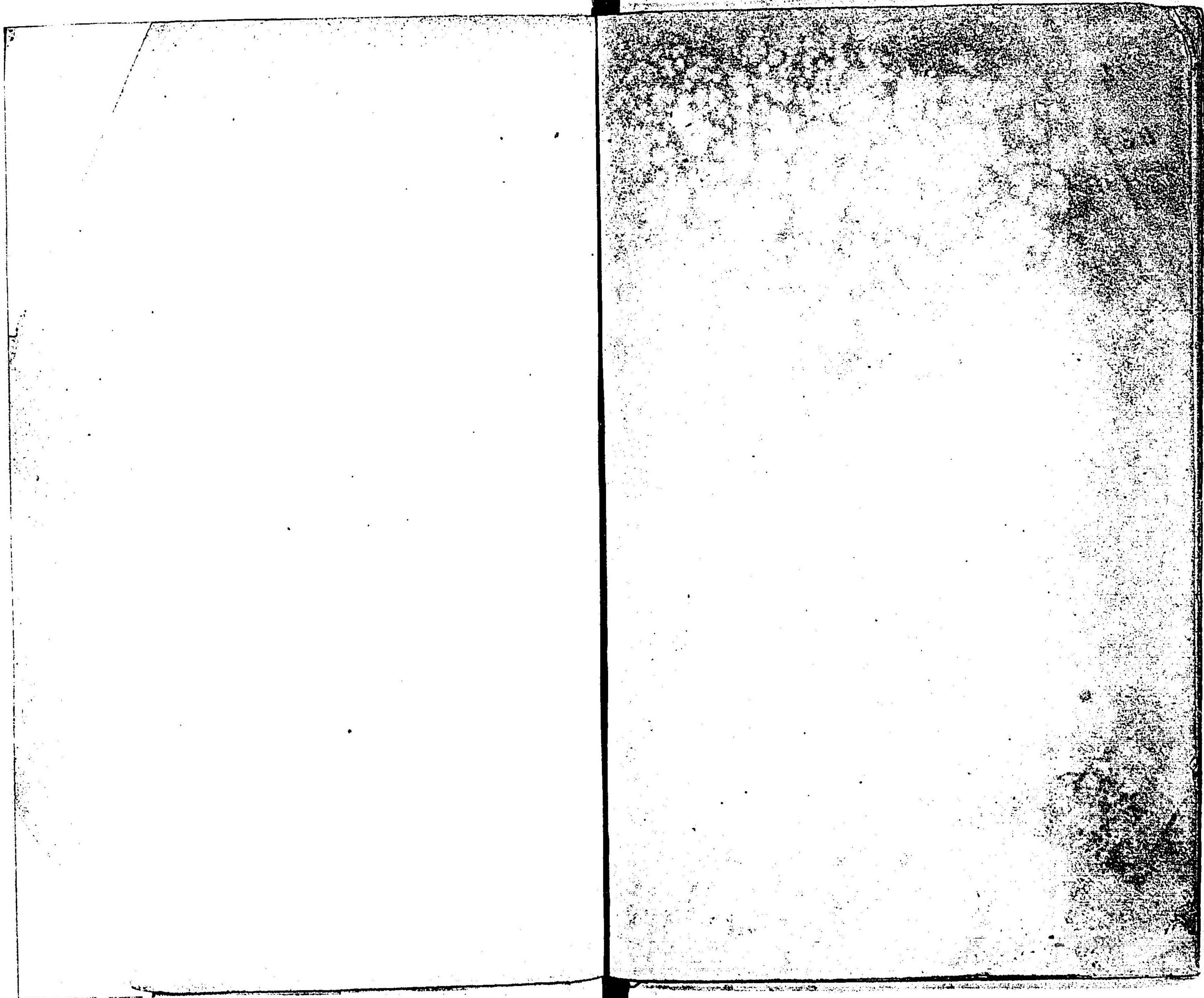
發行所

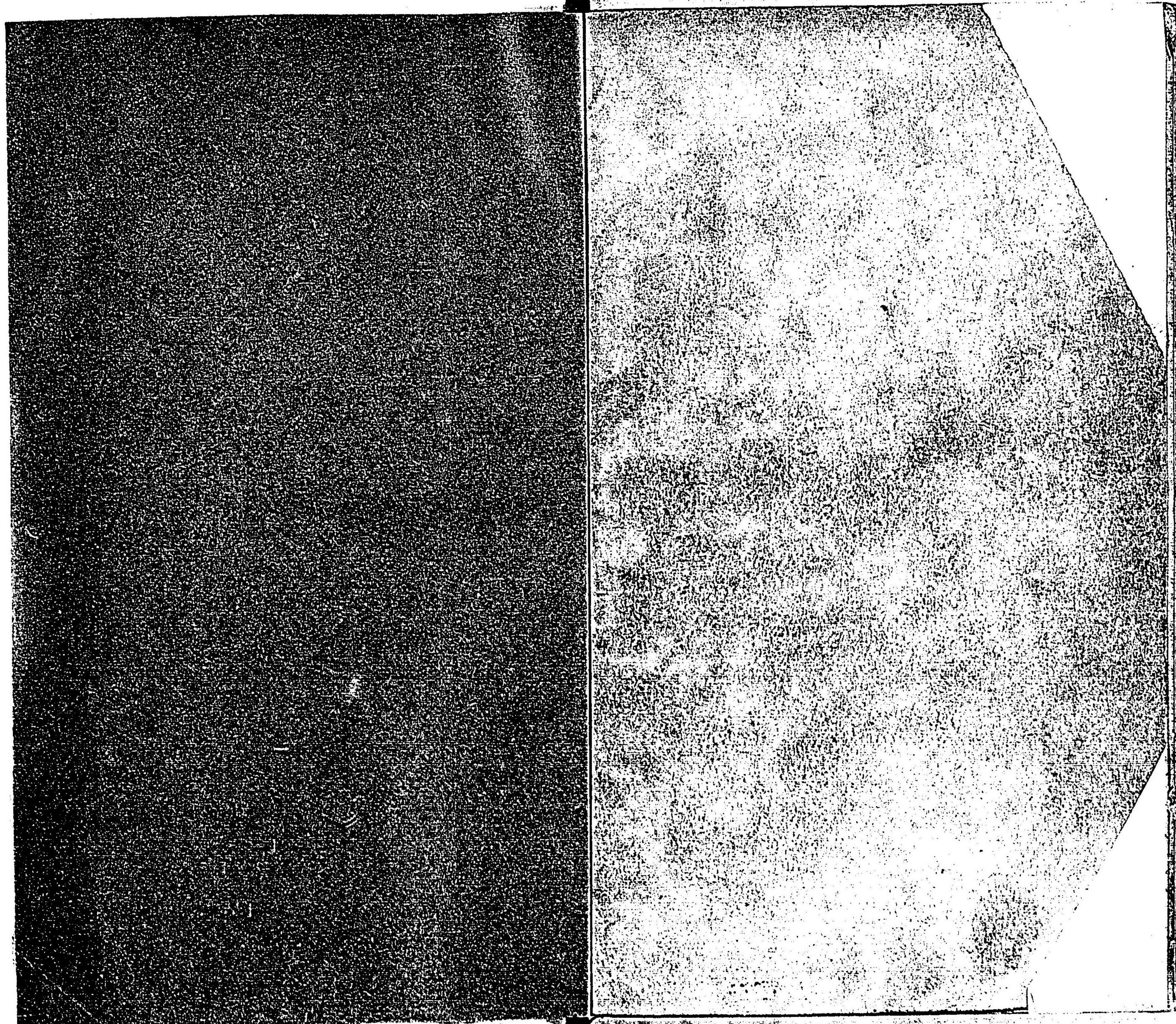
小川尙榮堂

東京市京橋區南紺屋町十八番地

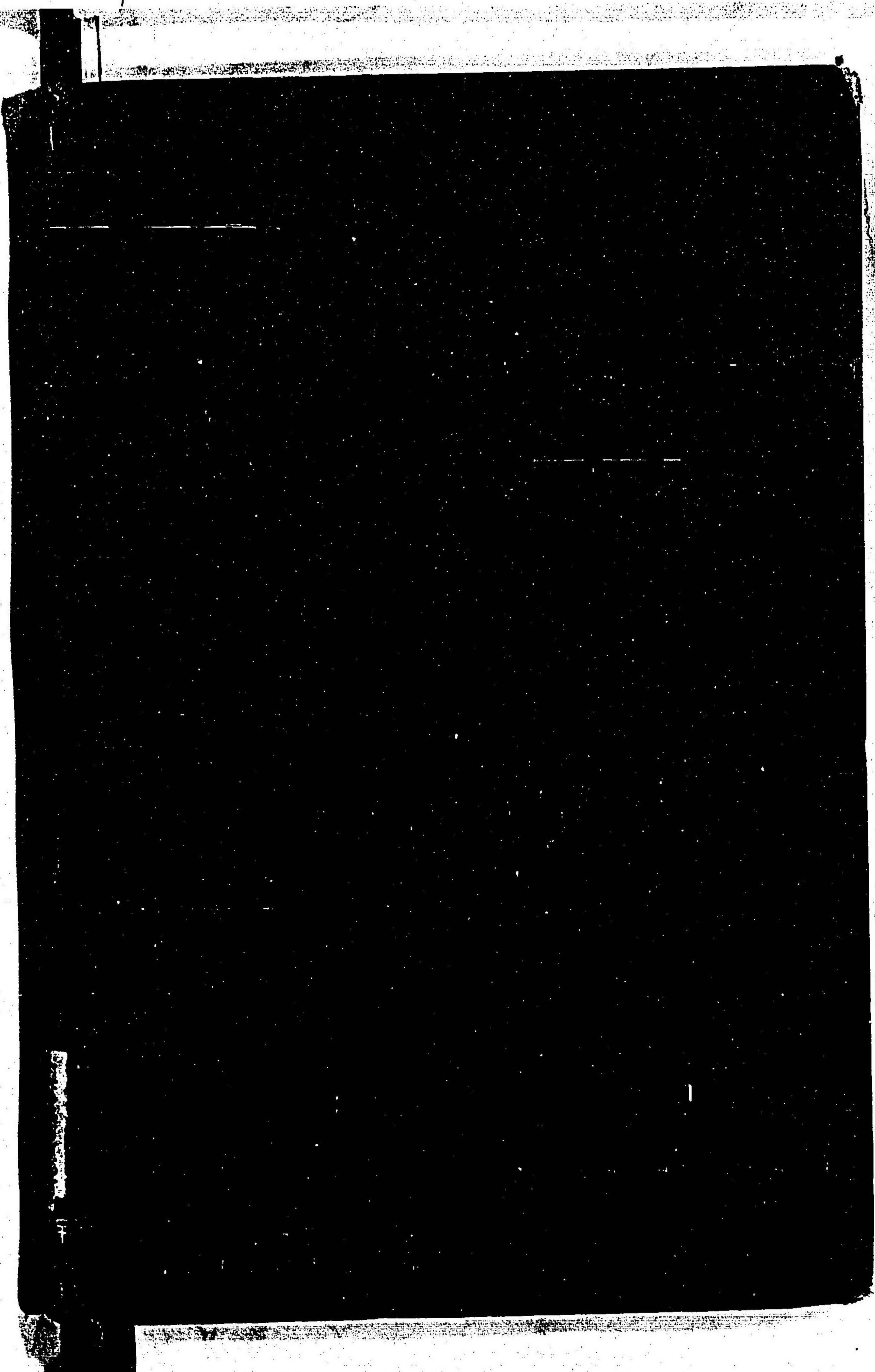
96

439





96
439



96
439

026541-000-1

96-439

清韓露渡航案内

桑村 常之丞 / 著

M37

ADD-0211



Handwritten text, possibly a signature or name, oriented vertically on the left page.